

クリエイティブな発想力を重視した 独自の探究型学習を軸に進路を切り拓く

青翔開智中学校・高校 (鳥取・私立)

青翔開智中学校・高校を訪れ、まず目を奪われるのは、ユニークな校舎や最先端のICT設備です。しかし、同校の本質はそこではなく、ハード環境によって効果的に実践している教育の中身にあります。その柱にあるのは同校オリジナルの探究型学習。生徒の進路にも確実に結びついています。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

🔍 探究型学習 🔍 ICT環境 🔍 図書館 🔍 デザイン思考 🔍 課題解決型職場体験 🔍 予備校連携

生徒と共に創ってきた 真の個性尊重を目指す学校

青翔開智中学校・高校は、「探究」「共成」「飛躍」をキーワードにした教育方針を掲げて2014年に開校した、生徒総数200人の小さな学校だ(図1)。その経営母体は、「生徒一人ひとりを大切に」をモットーとし、「公共性・独自性・永続性」を経営の柱とする学校法人鶏鳴学園。「地元」に私立の予備校がなく都会に出ざるをえない状況をなんとかしたい」と予備校を設立し、「県内の不登校者数の多さを放置できない」と不登校経験者のための全日型通信制高校を開校するなど、使命感をもって幅広い種類の学校運営にあたってきた。

青翔開智中学校・高校設立にあたって、学校法人理事長であり同校校長を務める横井司朗先生が目指したのは、「生徒それぞれがやりたいことをやれる学校」だ。

「『個性の尊重』を掲げる学校でも、『集団』が優先され、みんな同じように行動することを良しとする場合が少なくありません。そんな学校生活に馴染めず、学習に躓いたり、不登校になってしまった生徒たちを、これまで塾や通信制高校の運営のなかでたくさん見てきました。そんな生徒も、やりたいことをのびのびできる学校にしたいと考えました(横井校長)。

開校当初、同校には校則すらなかった。学校側がすべてを用意して押し付ける

のではなく、生徒と共に学校を創ってきたいと考えたからだ。校則は第一期生徒会によっていったん制定されたが、その後「もっと青開らしいものを」と声があがり、いまだ議論が続いている。クラブ活動は生徒が教員全員に対してプレゼンを行い、4分の3以上の賛同を得ることで創部される。現在までに13のクラブ・サークルが立ち上がった。修学旅行の内容も生徒が考えるが、生徒の希望を尊重してあって一本化せず、グループに分かれて実施した年もある。このほか、学園祭、宿泊研修、入学式や卒業式などの学校行事は、生徒会や生徒のプロジェクトグループが中心になって創ってきた。

図書とICTによる探究型学習で 主体的な課題解決力を育成

カリキュラムにおける最大の特徴は「探究型学習」だ。入学時から高校2年まで、総合的な学習の時間を使った科目「探究基礎」を設置(各2単位)。「あらかじめ用意された答え」のない課題に取り組み探究活動を行っている。

「中学から預かる子どもたちが大学卒業後、社会に出るのは10年後です。グローバル化やロボット・AIの進化によって、人の仕事内容や働き方は大きく変わっているでしょう。そんな未来を見据え、自分で課題発見して解決していく人を育てたいと考えています(横井校長)。

探究型学習を実践するうえで重要なツールとなる図書とICTの充実には、校舎設計段階から力を入れてきた。「図



School Data

2014年設立／普通科
 生徒数87人(男子39人・女子48人)※高校のみ
 進路状況(2017年3月実績)
 大学7人・短大1人・その他6人
 鳥取県鳥取市国府町新通り3-301-2
 TEL 0857-30-5541
 URL <http://seishokaichi.jp/>

Outline

鳥取県東部で初の中高一貫校として2014年に開校。カリキュラムの最大の特徴は、「あらかじめ用意された答え」のない問題に取り組む科目「探究基礎」。そのほか、学校全体が図書館のような校舎、先進的なICT設備、1クラス20人前後の少人数教育、英語4技能を鍛えるプログラム、予備校連携による大学入試対策授業などの特徴をもつ。

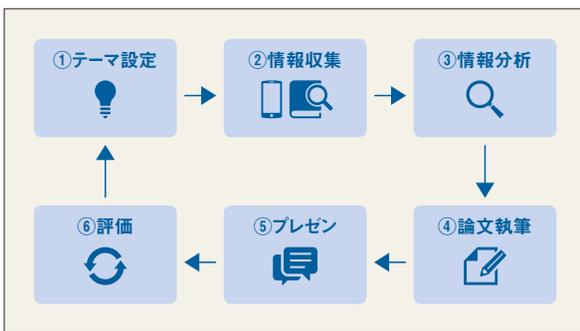
図1 青翔開智の教育方針

探究	共成	飛躍
好奇心+情熱 興味や問題点を自ら発見し、自発的・主体的に行動し、解決できる生徒を育成する。	協調+自律 自主自律の基、他者を重んじる人間を育成し、将来、日本のみならず世界の各界で活躍できる生徒を育成する。	挑戦+継続 「何を学びたいか」を大切に、探究型学習で鍛えた好奇心と情熱を自分の進路実現へと結びつけ、自ら進路選択できる生徒を育成する。
<ul style="list-style-type: none"> ■ 探究型学習で興味・関心を深める ■ 一人一台のiPadを教育ツールに活用 ■ ラーニングセンターを校舎の中心に配置 ■ 大学連携による最先端の学び 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 少人数クラス編成 ■ グループワークや対話式授業による協働的な学び ■ 生徒主体の学校行事づくり ■ 地域活動への参加、異学年交流 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 予備校連携の大学入試対策授業 ■ 難関大学突破カリキュラム ■ グローバルキャリアプランニング ■ 海外進学サポート

書館の中にある学校」というコンセプトの校舎には、ラーニングセンターを中心として至るところに書棚を設置し、必要な図書資料に出会いやすい環境を創出。昨年度の生徒1人あたり貸出冊数は中学校で22・7冊、高校で14・3冊と、実際に生徒は多くの図書に触れている。

また、ICT環境については、全館WiFi環境を整備し、全教室に短焦点プロジェクターを配備。ラーニングセン

図2 青翔開智の「探究基礎」6つのステップ



ターはICT活用の拠点でもあり、グループワーク用に開発された大きなモニター付きの高機能家具も設置している。生徒は一人一台タブレット端末を持ち、キーボード入力が必要な場合は学校共有のクロームブックも使用可能だ。

同校は探究の基本プロセスとして6つのステップを設定しているが(図2)、その全ステップにおいてICTを活用している。例えば、「テーマ設定」では付箋アプリを使ってアイデアマップを構築し、「情報分析」では表計算アプリによるアンケート集計・解析やWebサービスによる情報分析を行い、「評価」ではオンラインアンケート機能を使って発表や論文の評価を生徒全員から収集するといった具合だ。これらの施設・設備は、「探究基礎」のみならず他教科の授業や部活動、学校



校舎の中央に位置する吹き抜けの「ラーニングセンター」。グループワーク、インターネット会議、読書、自習、生徒集会など幅広く活用。



グループでプレゼンや議論を行うための小ゼミ室が4つある。壁全面をホワイトボードにしている部屋も。



「ラーニングセンター」には、パソコンやiPadを接続して大画面に映せる家具「メディアスケープ」を設置。

デザイン思考を導入し アイデア発想に重点

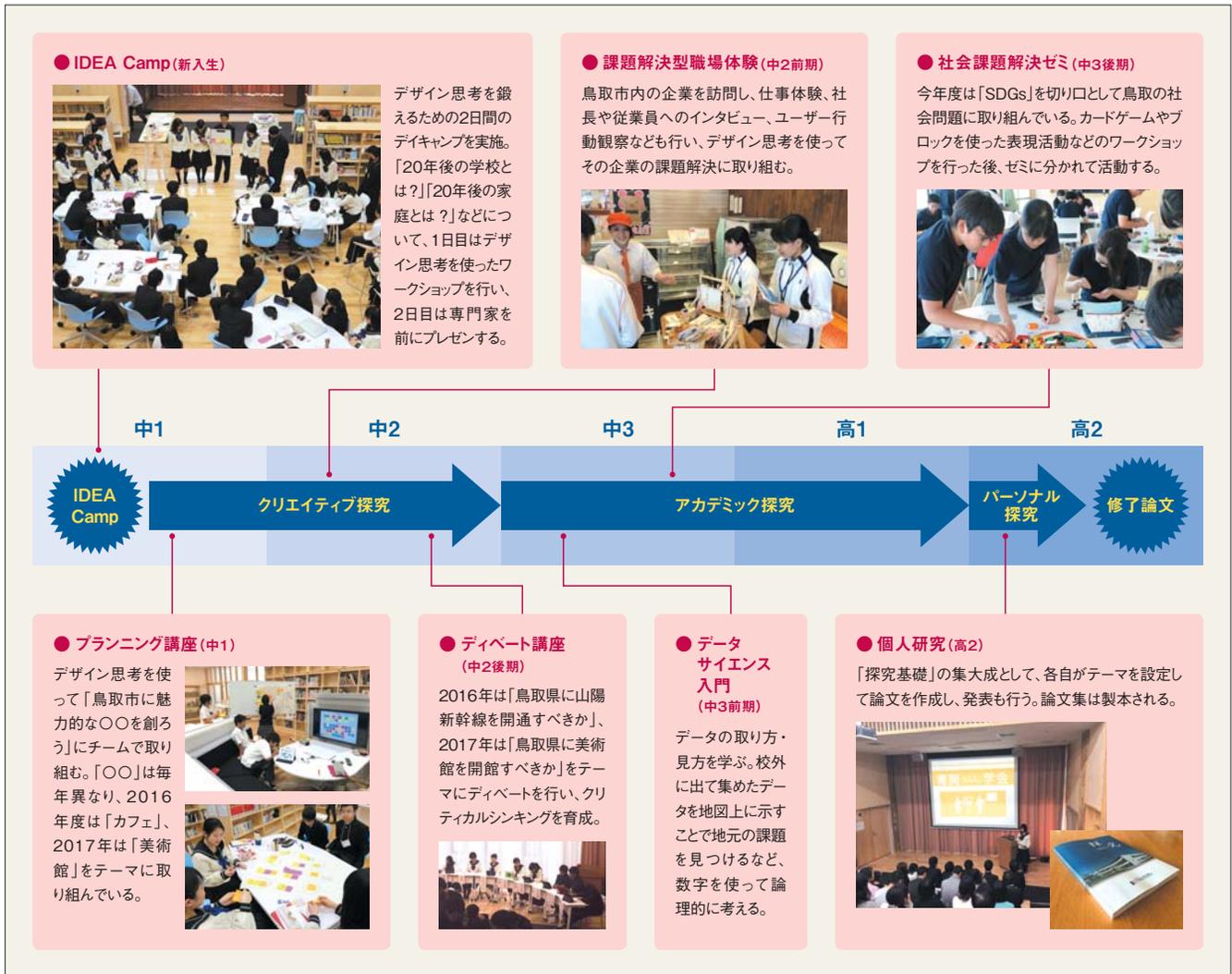
「探究基礎」のプログラム設計にあたっては、当初「堀川の奇跡」で知られる京都市立堀川高校のようなアカデミックな内容がイメージされた。しかし実際に展開してみると、同校の実態にそぐわない面も見えてきたという。

そこで、2年目以降はデザイン思考(※1)を取り入れ、プログラムの序盤はクリエイティブな方向に軌道修正した。デザイン思考のアプローチでは、現場でユーザー観察や体験を行い、発想を豊かに広げていく。問題の所在が明らかでない

行事など、あらゆる学校生活のなかで特別に意識せず当たり前のように使われているという。

※1: ①人々に共感することからニーズを知る。②問題点の定義。③アイデア創造。④プロトタイプ作成。⑤テストのプロセスを繰り返すことで、ニーズに合った商品・サービスを生み出す技法

図3 「探究基礎」ロードマップ(中高一貫のケース)



※上記は主な取り組み。高校入学者は2年間に圧縮して実施

場合にも、0から1を生み出すような画期的・革新的なもの・サービスの創造に有効とされ、クリエイティブな仕事の現場で注目されている。

開校準備から関わってきた副校長の織田澤博樹先生は、エンターテインメント業界でテーマパークやイベントの企画を行っていた前職の経験から、クリエイティブな力を発揮する価値や楽しさを知っている。「ある調査では、自らを『創造的』と思う日本の12〜18歳はわずか8%と、米、英国、オーストラリア、ドイツの平均44%に比べ著しく低い結果でした(※2)。創造的思考は生まれつきの才能によるものではありません。自分自身も後天的に身に付け、それによって仕事を充実したものにしてきました。生徒にもぜひその楽しさを伝えたいと考えています(織田澤副校長)。

職場体験で企業の課題を見つけ 解決策の提案まで行う

こうした経緯をたどって、現在の「探究基礎」には、「クリエイティブ探究」「アカデミック探究」「パーソナル探究」の3つのフェーズがある(図3)。これを中学入学者は5年間で取り組むが、高校入学者は2年間に圧縮して行う。具体的にどんなことを行っているのか、中学入学者のケースを追ってみよう。

最初のフェーズである「クリエイティブ探究」(中学1〜2年)は、デザイン思考を使った2日間のワークショップ「IDEA Camp」から始まる。その上で、デザイン

思考の手法を駆使して主に2つの講座に取り組む。

1つめの「プランニング講座」では、地元で新しい何かをゼロから創るグループ活動を行う。16年度のテーマは「鳥取市に魅力的なカフェを創ろう」。実際にカフェに足を運び行動観察するフィールドワーク、ブレインストーミングによる企画出し、図書とインターネットによる情報収集などを通して企画立案し、その内容をコンテスト形式で競う。優勝グループのプランは、地域のコミュニティスペースで1日カフェとして実現させた。

2つめの「課題解決型職場体験」は職場体験学習の発展形といえる。市内の企業を訪問して仕事を体験するだけでなく、働く人へのインタビューや職場の観察も行い、その企業の課題を見つけ解決策を提案する。

例えば、昨年、雑貨店で職場体験したグループは、来店客を観察するなかで隣接する書店の袋を持つお客さんの多さに気づいた。「この店は書店のついでに立ち寄る客が多いのではないかと考え、後日に保護者アンケートを実施したところ、仮説が間違いでなかったことが判明。その特徴を生かした集客策として、「ブックカバーの販売」や「書店のレシートを持参するとドリンクがもらえるサービス」などを雑貨店経営者に提案した。

「探究型学習において教員の役割は応援と進捗管理ぐらいです。生徒のアイデアに対して、『なぜそう思うの?』などの問いは投げかけますが、『こっしなぞ』と

※2: アドビ システムズ株式会社「Gen Z in the Classroom: Creating the Future」より



副校長
織田澤博樹先生



理事長・校長
横井司朗先生

Voice

第一期卒業生による「探究基礎」の振り返り

● 修了論文テーマ 「児童養護施設での虐待を減らすには」

幼稚園に行けない子どもに目を向けてみようと思ひ、テーマはすぐに決まりました。論文の土台というか、骨組みを創る段階が一番大変でした。探究を通して知ったことが大学の児童福祉の授業でもよく取り上げられているので、つながっていると感ずます。
(兵庫教育大学 学校教育学部 初等教育科1年・藤田悠希さん)

● 修了論文テーマ 「インドにおけるギリシア人の活動とその影響」

好きな分野をテーマにしたのは面白かったけど、自分の立てた仮説が当たってなくてがっかりすることもありました。さらに突き詰めようとすると自分のやりたいこと以外も調べたりしなくてはならなくて…規定の形には仕上げられなかったけど、もっと周りに研究を進めていくための相談をすればよかったというか、後悔もあります。テーマを切り替える決断をするべきだったかなとも思っています。
(京都大学 文学部 人文学科1年・東家 健くん)

● 修了論文テーマ 「市町村合併は本当に幸せを生むのか」

市町村合併や学校の統廃合のことを知って、自分がどんな形で地域に関わっていきたいのか、より明確になりました。今はスポーツや社会福祉を通して地元を盛り上げたいと思ひ、高齢者施設でのボランティア活動も始めています。
(鳥取大学 地域学部 地域創造コース1年・入江香菜子さん)

「高校2年までのさまざまな活動で目

体的な問いが目立つ。図書やインターネットでの調査のほか、Skypeなどを使って遠方の専門家から話を聞いたり、現場に向いてフィールドワークを行ったりしてテーマを深め、1万字程度の修了論文を執筆。全校規模で実施する発表会、「青開学会」でもプレゼンテーションを行う。

今春、高校入学1期生が卒業したが、その進路は修了論文のテーマとリンクしているケースが多く見られる。例えば、エネルギーや環境問題に興味があつて洋上風力発電の可能性に関する論文を執筆した生徒は、九州大学工学部へ。認知症の改善に関する論文を執筆した生徒は、鳥根大学医学部へ進学した。

キャリア講座や予備校連携で 目標達成をサポート

将来を考へる機会には「探究基礎」以外にも充実にしている。高校1年を対象に、自分自身のコアを形成している興味・能力・価値観について考へるワークショップを実施。世界で活躍する講師による講演会も年数回開催している。

一方で、大学入試対策もおろそかにはしていない。同じ学校法人が運営する予備校との連携により、放課後にさまざまな学習サポートを実施。また、高校2年からはカリキュラムに予備校連携授業を取り入れ、高校3年になるとその割合を約6割に増やし、実践的な大学入試対策を行っている。

いった指示はしません。それをやってしまふと、アイデアが生徒自身のものでなくなつてしまいますから」(織田澤副校長)

修了論文のテーマが 進路の方向とリンク

デザイン思考を取り入れたことは、生徒の発想やプレゼンのスキル向上に大きく寄与した。しかし、「真にやりたいと思へる自分自身のテーマを見つけることは、デザイン思考だけではできない」と織田澤副校長。そこで生きてくるのが、次からのフェーズだ。広く社会に目を向けさせ、生徒個人の興味・関心を問う内容に入つていく。

次のフェーズ、「アカデミック探究」(中学3年〜高校1年)では、まず「データサ

イエンス入門」でフィールドワークを絡めながらデータの取り方と見方を学び、論理的な思考力を鍛える。

そして、「社会課題解決ゼミ」では、「SDGs」(国連が設定する持続可能な開発目標)の17項目から生徒がそれぞれ興味をもつたテーマ別に活動する。今年度は「飢餓」「ジェンダー」「平和」など6つのゼミが発足。ゼミごとに内容や範囲を徐々に広げていき、鳥取から日本、最終的には世界の課題について考へる。

最終フェーズである「パーソナル探究」(高校2年)では、本格的な論文執筆に取り組む。各自がやりたい研究や解決したい課題を設定したテーマには、「鳥取市庁舎整備問題が混迷した原因はどこにあるのか」「植物を育てる光は、LEDと太陽光のどちらが効率がいいのか」など具

標をもつ生徒は多く、高校3年は目標達成のためにがんばる時期というのわかつていて、切り替えて勉強しています」(横井校長)

最近海外大学への進学を考へる生徒も出始めた。従来から力を入れてきた英語4技能の習得やグローバル教育のほか、名門海外大学生と議論を行うイングリッシュキャンプや、海外大学進学セミナーも実施。今後は全員参加の海外短期研修旅行も行う予定だ。

初の卒業生14人は、京都大学や九州大学、鳥取大学など、難関大学を含むさまざまな道に進んだ。横井校長は「期待以上の成長を遂げてくれた」と生徒の努力を称える。

「常識やルールにとられない発想のできるクリエイティブ人材は、周囲を巻き込んで社会に大きなうねりを起こしていくでしょう。卒業生が将来、そんな動きの核となつて活躍してくれることを期待しています」(横井校長)

開校から3年余り。地元の理解や生徒募集、教員採用など、まだ課題が少なくないという。しかし、従来の枠組みを打ち破るような新しい学校を目指し、試行錯誤しながら積み上げてきたことは確実に成果をあげている。今後も、外部機関との連携による探究型学習の評価方法の研究など、新しい教育方法の開拓に手を緩めない方針だ。